

伊藤 光 昌 (イトウ ミツマサ)

株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズ会長

トータルモーションコントロールの 高度化を目指す

◆計画を上回る増収増益を達成

専務執行役員 川喜田 淳

まず計画との比較においては、2006年9月中間期の連結業績は、売上高・利益ともに計画を上回ることができた。売上が伸びた要因は、日本をはじめ米国での半導体製造装置向けの需要が、予想を超えてよかったためである。産業用ロボット向けに関しても昨年同期には若干減少したが、当中間期においては増加に転じた。さらにモーターメーカー様向けのギアヘッドは、ハーモニックドライブ及び遊星減速機ともに、半導体製造装置向けが増加した。営業利益の増益は、主に増収の効果と生産性の改善等による。営業外収支は、持分法適用のドイツ関連会社の業績が予想を上回ったことが、経常利益を押し上げた。加えて、米国子会社の営業外収益も予想を上回ったことも要因の一つである。中間純利益は開発投資減税の税額控除により、税金費用が見通しを下回ったことなどの影響も加わった結果14億98百万円となった。

次に当中間期を前年同期と比較すると、売上高は23億3百万円増加したが、そのうち、昨年末に米国に設立した合弁会社ハーモニック・ドライブ・エルエルシーが連結の範囲に含まれたことによる増加分が、三分之一を占めている。売上総利益は12億68百万円増で、工場の操業度・生産性の向上が図られ、単体並びに連結子会社の収益性改善が、粗利益を押し上げた。営業利益は、米国子会社で販管費が約3億55百万円増えたものの9億12百万円増加した。経常利益は10億36百万円増で、ドイツ関連会社の持分法投資利益が約84百万円増加した。中間純利益は5億84百万円増で、前年に比べて63.9%増の結果になった。EPSは当中間期中に転換社債の行使請求による希薄化効果があり50.2%増になっている。

◆主要グループ会社も好調に推移

主要グループ会社の業績のトピックとしては、昨年12月にナブテスコ社との合弁で米国に設立したハーモニック・ドライブ・エルエルシーがある。同社では半導体製造装置向けが非常に好調に推移したことから、売上高は15億23百万円となり、期首の予想より約10%アップとなった。同社設立は営業面でのシナジー効果に加え、製造面でもさまざまな生産性改善の取り組みを継続中であり、収益性に関しても来年はさらなる改善を期待している。国内の100%子会社ハーモニック・エイディではモーターメーカー様向けが、主に半導体製造装置関連を中心に需要は高い水準を維持した。同時に、モーターメーカー様以外にも顧客層が広がったことも増収増益に寄与した。持分法適用のハーモニック・ドライブ・アーゲーは、欧州市場において、工作機をはじめとした幅広い業種からの受注が増加したことから、順調に業績を拡大した。

当社単体も増収増益となった。経常利益の増減要因を分析するとプラス要因は増収による増益効果が8億40百万円、営業外収支の改善が20百万円の増加である。マイナス要因は限界利益率等の低下が39百万円あるが、これは主に、プロダクトミックスの変化による影響によるものである。製造固定費や販管費では、給与・賞与等の増加があったが、退職給付費用の減少で相殺され、若干のマイナスとなった。

当中間期末の資産はトータルで231億58百万円である。現・預金及び有価証券は前期末に比べて4億21百万円増加した。売上債権も売上の増加に伴って増加した。固定資産関係は大きな変化はなかった。負債に関しては転換社債の転換が進み、社債が前期末の25億50百万円から6億円へ減少している。また、転換請求に対して自己株式の代用交付と新株の発行を行ったことから、純資産が増加し、自己資本比率は前期末の64.3%から72.1%になった。

連結キャッシュ・フローの状況として、営業活動によるキャッシュ・フローは、税金等調整前中間純利益が10億円強増加したが、同時に売上債権も増加したため前年中間期と同じ水準となっている。投資活動によるキャッシュ・フローは前年同期と比較すると当中間期はかなり低い数字になっているが、これは昨年に投資有価証券を取得したことで大きく数字が膨らんだためである。財務活動によるキャッシュ・フローが増加した要因は、米国新会社の事業開始に当たり運転資金を調達したことによるものである。これらの結果、現金及び現

金同等物は4億20百万円の増加になった。

◆2007年3月期の業績予想

通期の売上高は上期の上振れ分を加味し、期初予想に対し11億円増の181億円を見込んでいる。用途別には、産業用ロボット向けは上期と同じ水準を見込んでおり、半導体製造装置関連は投資が増えているがさらに上に行くとは考えていない。液晶製造装置関連は当初の見通しより若干減っており、本格的に回復するにはもう少し時間を要すると予測している。営業費用では大きなコスト構造の変化を見込んではいないが、連結子会社において、将来を見据えた人員増による人件費の増加を見込んでいる。これらを加味して営業利益は43億80百万円（前期比36.7%増）を見込んでいる。経常利益は、下期の持分法投資利益は上期比では減少するとの見込みを勘案し、46億50百万円（同37.4%増）を予想している。当期純利益は27億70百万円（同31%増）の見込みである。

主要グループ各社では、ハーモニック・ドライブ・エルエルシーは半導体製造装置向けが現在も好調に推移していることに加え、政府関連の受注も一定量確保できていることから、下期の売上高も上期と同水準の15億77百万円を見込んでいる。ハーモニック・エイディはモーターメーカー様向けのギアヘッドに若干の不透明感があり、好調に推移した上期の実績に比べて下期は、約8%の減収を見込んでいる。なお、当期純利益は前年と同水準になる見込みである。ハーモニック・ドライブ・アーゲーは下期も堅調に推移する見通しで、売上は前年同期と比べて約30%増を見込んでいる。

当社単体の売上高は、期初予想に対して10億円増加の160億円を予測している。経常利益の増加を前期と比較して分析すると、増収による影響で11億77百万円の増加を見込んでいる。減少要因としては限界利益率等の低下が65百万円、製造固定費の増加が25百万円、販管費の増加が1億32百万円と見込んでいる。

2003年3月期から当社単体の売上高は順調に増加し、当期を含め5期連続の増収を予想している。製品別では当期の全体の売上高が前期比約15%増加する中で、メカトロニクス製品は21%増を目論んでいる。用途別では既存のアプリケーションに加えてその他の売上が増えているので、次の新しい芽がここから出てくると期待している。販管費については、人件費は微増にとどめ、研究開発費の積み増しを下期に行おうと考えている。通期の営業利益は38億円を見込んでおり、売上高営業利益率は23.7%を計画している。

◆課題解決力とものづくりの競争力を向上させる

代表取締役会長 伊藤光昌

3カ年計画達成の鍵はメカトロニクス事業の成長にあると考えている。例えば、自動車の快適性・高精度化を考えたときに、生産設備はますますの精度向上が必要になってくるため、当社では求められる要素を高精度化、軽量化、小型化、中空扁平に絞って研究・開発を行っている。当社が標榜している「トータルモーションコントロール」の概念は、今後も伸びていく精密制御の分野の中で、減速機、モーター、センサー、コントローラー、ドライバー、そしてクロスローラーベアリング等のその他の各要素を統合して考えることであり、これがメカトロニクス製品であると理解している。“MECHATRONICS”を例にすると、ハーモニックドライブ[®]のコンポーネントにクロスローラーベアリングや軸受等を付けることにより一つのユニットという形になり、このユニットにエンコーダーとモーターを付けたものがアクチュエーターとなり、さらにコントローラー/ドライバーという制御機器が加わり、メカトロニクス製品として精密制御が可能になる。

当社のメカトロニクス製品は、その動きによって次の四つに分けられる。①回転型が一番応用の範囲が広く、当社としての販売量が多い。より小型、軽量、精密なものが求められるであろうという観点で無限の可能性があると考えている。例えば、半導体製造ラインやそこで使われる製造装置には、スペースに制限があることが多いため、小型・薄型のアクチュエーターへのニーズが高く、当社製品が採用されている。また、ウエハーは高価であり、傷を付けないようにするために高い位置決め精度と回転の滑らかさも求められている。②直動型は直線運動を求める装置に向けたものである。当社の直動製品は回転運動を送りネジで直線運動に変えており、超精密な動きが特徴である。用途の一例としては、半導体製造装置用の精密ステージや、ハワイのすばるがある。③揺動型は光学スキャナーとも呼び、有限角を高速に往復動作するタイプである。一般的にはレーザーマーカなどに使われている。④複合・モジュール型は一つの運動だけではなく複数軸で複雑な動きをするもので、例えば、3本指の高速ロボットハンドは、東京大学の石川教授の研究であるビジョンセンサーの開発に合わせて当社の総合技術を凝縮して開発したものである。人間の目の約30倍の処理能力を持つビ

ジョンセンサーに追従可能なこのロボットハンドには、いろいろな可能性があるため、多くの問い合わせをいただいている。いずれ当社の大きな商品の軸になると期待している。

メカトロニクス製品の用途別売上高実績では、比較的ロボットが少ないが、これはお客様自身が用途に合ったものを製造しているためである。半導体製造装置では幅広く採用されており、前工程から後工程まで当社の製品が数多く使われている。光学機器や計測装置も多く、先ほど紹介した揺動型の光学スキャナーがレーザーマーカに採用されているほか、超高精度な分光機等に回転型や直動型のアクチュエーターが使われている。今後も高精度化の要求に応えるため、日々努力していく所存である。

当社の使命はお客様からの課題に対する解決力を上げていくことであると考えている。そのためには「コア技術の深耕と拡充及びそれを実現する技能の追求」、「要素技術・技能の統合能力向上」、「お客様のニーズを高い次元で短期間に満足できる体制の構築」が重要と考えている。そして現在の納期遵守率98%をさらに向上するべく、“ものづくり”の競争力向上を目指す。「清流化生産の仕組みの高度化」、「生産技術の充実」、「技能者の育成」を、この中期計画でさらに進めていきたいと考えている。

(平成18年11月28日・東京)